一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.50 （2024年8月31日発行）

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発　行：　（一社）東洋音楽学会 沖縄支部
事務局：〒903-8602　沖縄県那覇市首里当蔵町1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部　小西研究室気付
http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html
MAIL: okinawashibu.toyo@gmail.com

【第82回定例研究会記録】

日時：2024年7月21日（日）13:00～14:40
オンライン開催（Web会議ツールZoom）

研究発表

「女性歌三線奏者の演奏分析 ―声に着目した比較検証を通して―」
発表者：山本 佳穂（東日本支部）

■発表要旨

琉球古典音楽における歌三線は男性の手によって発展してきたため、女性にとっては演奏上の困難が生じやすい音楽である。そこで、世代の異なる女性歌三線奏者２名の演奏を比較し、女性奏者における世代間の演奏様式の違いの一端を明らかにするとともに、一人の女性奏者の経年による演奏の変化を辿ることを試みた。

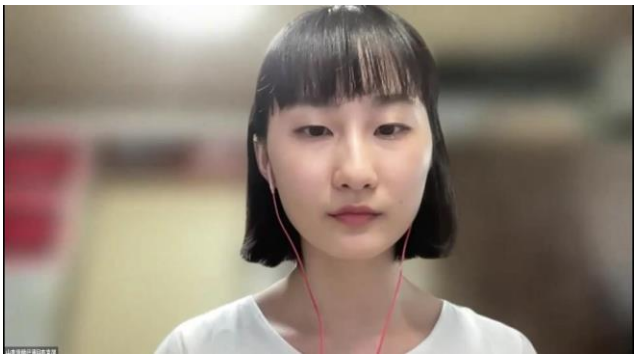
先行研究では、音声分析ソフトを用いて各流派の演奏様式を検討したり（新城2017）、演奏音源を聴取し声質や演奏上の特徴を記述したり（仲村2010）、その両方を取り入れた分析を行ったりしていた（仲村2016）。これらを踏まえて、本発表では対象となる演奏音源を五線譜に実音で採譜し、聴き取れた範囲で技法やブレスの位置、発声の変化を大まかに記録するという方法をとった。

使用した音源の演奏者はいずれも沖縄県出身で、琉球古典音楽野村流保存会所属の女性奏者である。１人目の金城タケ子（1942～）は女性として初めて独演会を開催した歌三線奏者で、女性奏者の草分けとして広く知られている。金城の演奏音源は、1962年のプライベート録音と、1996年及び2016年に開催された独演会の記録映像を使用した。２人目の親川遥（1991～）は現在気鋭の女性奏者として注目を集めており、2024年４月にCD「綾もどろ～月の若清ら～」（よしもとミュージック）を発売した。これらの中から、複数の音源に共通した楽曲「遊しょどん節」「踊こはでさ節」「散山節」について演奏分析を行った。

分析の結果、２名の演奏には声質がほぼ一定に聴こえるという共通点があることが明らかになった。ただし、その実行方法には違いがある。金城は今回検証した３つの年代全てにおいて、どの音域でも発声方法が同じだった。一方、親川は音域により発声方法が変化している可能性が高く、その変化が分からないように均質に歌うことを心がけている。また、金城は発音後も一定の強さで声を伸ばし続けているのに対し、親川は１音の中で小さな抑揚があることが多い。

以上を踏まえ、今後の課題として、演奏分析の方法の再検討、個々の演奏の特徴を「演奏様式」

と見なすことの妥当性、分析対象演目の拡大の３つを挙げた。今回実施した分析では、「どのように聞こえるか」はある程度明らかにできるものの、「実際にどのように発声しているか」を明らかにするには限界があるため、音声分析ソフトを用いるなど、より客観的な分析の実施も視野に入れる必要がある。また、今回演奏分析を行った２名の歌唱法をそれぞれの世代の「演奏様式」と見なすのはいささか無理がある。そのため、男性奏者同士、男性奏者と女性奏者の比較も併せて行い、個人の特徴と「演奏様式」を区別する手がかりとする。さらに、本発表では昔節や口説には一切触れていない。このような「大曲」や闊達な曲想を持つ楽曲では、同一人物でも歌唱法に大きな違いが現れる可能性があるため、より幅広い曲種・楽曲における演奏分析も行いたいと考えている。



（写真１：山本 佳穂氏）

■傍聴記

山本佳穂氏の発表は、女声による歌三線（琉球古典音楽）演唱の問題点を論ずる研究であった。

山本氏は、発声の問題点を具体的に説明するために、1960 年代にデビューして以来、女性歌三線演奏家の草分け的存在として活躍してきた金城タケ子氏の演奏と、現在の若手ホープとして演奏会やマスコミで活躍している親川遙氏の演奏の録音を聴き比べながら技術的課題を論じた。

山本氏の研究は実演上の問題がテーマであるから、音を聴いて初めて実感でき、主張が納得できる。その意味で、口頭発表という場は、論文よりもはるかにこの研究の発表に相応しい場であった。金城タケ子氏と親川遙氏の発声技巧の違いの指摘が、録音を通してとても良く理解できた。

その一方で、録音を提示する方法、手順はけっこう難しい。説明によれば、歌三線の演唱において、特に女声は高音部の発声が声区変換との関係で難しいという。発表の最初の要点は、この高音部の旋律に対し、２人の演奏家がどのように対処しているかを聴き分けることが求められたが、実演家でない例会参加者にはこれが難しい。数分間の録音を聴き終えた後で当該箇所の譜例が示されたが、後から「ここが違う」と説明されても「そうだったのか‥‥」と思うしかない。分析を譜例で説明する場合は、先に譜例を示して、要点、「聴き所」を強調してから、音を流して当該箇所を確認・実感していただく、という手順が望ましいだろう。

山本氏の発表のもう一つの論点は、均質に伸ばす発声と、抑揚の変化をつけながら伸ばす発声の違いという指摘であった。これはとても興味深い視点であり、今後うまく展開できれば、良い研究に発展するのではないかと感じた。問題となるのは、この違いが演奏者の個性なのか、習熟度なのか、時代の好み（流行）なのか、という点であろう。

筆者の個人的な思い出だが、かつて、小泉文夫先生の講義で、1960 年代の三波春夫の発声は均質的で「日本的ベルカントを確立した」のに対し、次世代の美空ひばりは「内容表現と結びついた多彩な発声で新しい表現を確立した」というお話があった。

山本氏は、今後より広い視野で検証を進めたい旨述べていたが、質疑でも指摘されていたように、男声でもそのような違いはないのか、もしあれば、ジェンダー論とは別に、時代変化として捉える視点も考えられる。男声にはない要素が認められるのであれば、まさに山本氏が述べたように、女性ならではの表現として、歌三線演奏の新しい表現法として提起できるかもしれない。

最後に、楽譜というものは、工工四であれ、五線譜であれ、演奏者や研究者の概念を示すに過ぎず、事実を示すものではないので、実証的な演奏研究をめざす限り、音声分析はぜひ取り組むべき

過程である。山本氏もそのような計画をお持ちとのことなので、その成果に期待したい。楽しみな研究である。（報告：金城 厚）

報告

「中学校教員として赴任した私の伊是名島での４ヶ月間の暮らし ―伊是名区の三線クラブを中心に―」
報告者：鈴木 杜萌（沖縄支部）

■発表要旨

本発表は研究発表ではなく、筆者が伊是名島の日常で経験したことを伝える報告である。筆者は今年度から教員として伊是名中学校に赴任し、本研究会で伊是名の様子について発表してほしいと依頼を受けた。そのため、発表の内容は、伊是名島の全体像を、調査を通して捉えたものではなく、筆者が関わってきたコミュニティや活動に偏りがある。

伊是名島は、人口 1,322 人、周囲 16km の島である。1939 年に伊平屋村から分村し、1955 年をピークに人口は減少した。尚円王の出身地として有名で、フェリーや村営塾の名前など様々なところに尚円王の愛称が使われている。島内には、保育園、幼稚園、小学校、中学校がそれぞれ一つずつある。本発表では、このうち筆者の勤務校である伊是名中学校について紹介する。

伊是名中学校には現在 47 名の生徒が通っている。島内に高等学校がないため、子どもたちは 15 歳で離島し、本島ないしは県外の上級学校に進学する。これを「島立ち」と呼んでおり、生活や学習を自立させることは、教育計画の中でも重要な位置づけにある。各学年には 10 名～20 名の生徒がおり、保育園の頃からほとんど変わらないメンバーで中学卒業を迎える。このため、同学年に同性が少なかったり、新しい出会いが無かったりと、人間関係に苦労する生徒もいる。学校行事には、無人島に行き、漁や野外炊飯の体験をする自然体験学習や、ハーリー大会があり、これらは多くの島民の協力で成り立っている。部活動はバスケットボール部やサッカー部など運動部が盛んな一方、現在文化部はない。筆者が担当する音楽科では、毎回の授業ではじめ５分～10 分で歌三線に取り組んでいるほか、６月頃から学校の玄関にある休憩スペースに三線を設置し、生徒が三線を触る機会を増やしている。

続いて、伊是名区三線クラブの活動を紹介する。当クラブは、毎週火曜日 19 時から 22 時まで公民館で行われる。10 歳から 73 歳までの約 13 名が参加しており、初心者向けに基礎的な曲の練習のほか、ウンナーや豊年祭など行事に向けて地方の練習をしている。本発表では、ウンナーに向けた練習の様子と、豊年祭の前日に演じられるティルクグチと呼ばれる稲作に関する歌を動画で紹介した。また、来年度の豊年祭に向けて、沖縄芝居の計画を始めていることも紹介した。

（写真２：鈴木 杜萌氏）

■傍聴記

報告者は、2024 年４月より中学校教員として伊是名島に赴任しており、今回の内容は学校教員という立場からの報告であるという前置きがなされた。まず、尚円王の出生地として有名な伊是名村の概要説明からはじまり、報告者が勤務する伊是名中学校と生徒を取り巻く状況について報告された。伊是名中学校には、１年生 16 名、２年生 11 名、３年生 20 名の計 47 名の生徒がおり、報告者は２年生の担任をしている。伊是名中学校では運動部が活発である一方で文化部が無いため、報告者は生徒が少しでも色々な音楽に触れられるよう工夫している。沖縄県立芸術大学出身の報告者は、大学時代の友人に依頼してフルート、ヴァイオリ

ン、歌などの生の演奏を生徒に聴かせる場をつくっている。また、三線を好きではないと答える生徒が多いことから、五分間の帯時間で三線に触れる時間を取り、三線を演奏することに生徒が関心を持てるようにしている。そのこともあり、学校のすきま時間に自主的に三線を弾く生徒の姿が見られたとのことである。

中学校での生徒の様子が報告された後、島の人たちとの交流、そして伊是名区の三線クラブでの交流の様子が報告された。学校近くにある電気屋では、民謡好きのご夫婦が料理を出してくれ、そこに集まる地域の人、教員、保護者が近い距離感で交流している。報告者は、元々嘉手納町のエイサー団体で三線を演奏しており、三線を通しての交流の様子が紹介された。伊是名島にある五つの字の内、伊是名集落にのみ三線クラブがある。三線クラブの参加者は 10～73 歳の 13 名で、19 時から 20 時までが小学生などの初心者の時間、20 時以降はベテランの練習時間となる。ベテラン組は、お酒も嗜みながらゆったりと三線の演奏を楽しむ。伊是名島では、旧暦の六月に稲の豊作を祈願するウンナーが行われる。さらに、旧暦八月十一日の豊年祭の前日にティルクグチという伊是名に残る古謡が歌われる。ティルクグチの歌詞は、稲づくりのマニュアルになっており、豊作祈願のウンナーが行われる六月の内容が歌われるところでは、テンポが速まる。ウンナーに関わる歌詞は特に重視されており、報告者自身、何度も三線クラブの人から指摘をされたとのことである。

最後に、１年後の豊年祭では《泊阿嘉》という女性が２名必要な演目を上演しようという計画が上がっていることが報告された。この演目は、コロナ禍もあり６年以上上演されていないが、報告者の赴任をきっかけにそのような話が出ているとのことであった。

質疑では、伊是名において若い世代が三線に触れる機会はどの程度あるかについての質問がなされ、前任の中学校音楽科教員が、小学校で三線のクラブを指導していたこと、中学生以上になるとエイサーの練習に参加するようになるとの回答があった。島ならではの学校教員と地域住民との豊かな交流、そして新たなメンバーが島に来たことによる《泊阿嘉》の上演の試みなど、教員の赴任による地域への影響が垣間見られる報告であった。

（報告：小川 由美）

――お知らせ――

❶研究発表の募集と締切日について

エントリー締切日：2024 年 12 月 13 日（金）

※研究発表は、なるべく事務局へメールでご応募ください。郵送の場合は同日必着です。

東洋音楽学会沖縄支部メールアドレス
Okinawashibu.toyo@gmail.com

注）12 月 13 日締切の応募にエントリーなさった応募者の発表につきましては、第 83 回例会（2025 年２月頃）での発表予定ですが、応募状況によっては、第 84 回例会（2025 年７月頃予定）での発表となる可能性をお含みおきください。

❷第 83 回例会情報

開催日時、発表等のタイトルにつきましては、2025 年１月上旬を目途にご案内さしあげる予定です。

（一社）東洋音楽学会 沖縄支部通信 No. 50 編集委員
小川恵祐、高瀬澄子、多和田真理
塚原健太、三島わかな
次号 No. 51 は 2025 年３月に発行予定